

〔研究論文〕

太平洋戦争開戦後における文学者の使命

松本 和也

〔Article〕

Mission of the Literary Person after the Pacific War Outbreak of War

Katsuya MATSUMOTO

Abstract

This paper shows how literary scholars considered their roles during the period from 1941 to 1945 and after the Pacific War, by investigating empirical newspapers and magazines at that time.

In the first chapter I examined the previous history studies of literature after the Pacific War.

While only cultural controls and private literary activities are paid attention to the history of literature, I confirmed that public literary activities have not yet been described.

In Chapters 2 and 3, I surveyed and analyzed the discourse situation where literary scholars were strictly questioned which seems to be directly proportional to the worsening of the battlefield.

Finally, I summarized the discussion above and investigated and analyzed the evaluation axis of the literary work in the end of the Pacific War. As a result, I revealed that literary activities continued until the end of the Pacific War.

I

太平洋戦争開戦後の文学（史）は、従来の文学史において否定的に記述されてきた¹。

平野謙『昭和文学史』では、「第三章 昭和十年代／第二節 太平洋戦争下の文学」が当該箇所だが、13ページに及ぶ記述の中で指摘されるのは文化統制に関わる局面である。平野は、『イデオログの挑発』を《効果あらしめた組織の結成そのもの》が、『日本文芸中央会、日本文学研究会、日本文学報国会というふうに、一元的な官許団体としてできあがりつつあった事実』と、あわせて《その組織を裏がわから強力にささえていた日本出版文化協会のような統制機関の出現こそ、いやおうなく文学のありかたを一変させずにはおかなかった》²ことを指摘している。さらに、『ファシズムと抱合したいわゆる日本主義イデオロギイ』³が跋扈した状況を描きながら平野は、次のようにして、太平洋戦争末期の具体的な文学活動について論及していく。

〔昭和18年以降〕全国各地に空襲の被害はいよいよ熾烈となって、全国民はその日その日の生存にだけ心をうばわれ、もはやどのような意味でも、文学など存在する余地がないかみえた。／しかし、それらの完全な末期的様相にもかかわらず、戦後に発表された永井荷風の『罹災日録』によれば、老荷風は東京から明石、岡山と、その避難先を転々しながら、やはり文学に対するのぞみを失わず、「踊子」「浮沈」など戦後にいち早く発表された原稿を

いだいて流寓の生活を送っていたのである。谷崎潤一郎もまた「細雪」の稿をひそかに書きつづけ、私家版として知己に贈ったりしていたのである。また舟橋聖一も転々と居を移しながら、その代表作「悉皆屋康吉」を完成していたのである。これは「細雪」などとならんで、太平洋戦争中の誇るべき現代小説のひとつとすることができる。⁴

ここで平野が特筆しているのは、戦争末期における公の文学活動ではなく、戦後を見据えて、水面下で私的に守られた文学者の文学精神であり、その成果としての文学作品である。

もう1点、曾根博義「戦前・戦中の文学——昭和8年から敗戦まで」も参照してみるならば、太平洋戦争開戦後の文学活動について、次の記述がみられる。

太平洋戦争開戦以後、敗戦までの文学は戦争一色で塗潰された。〔略〕私小説や歴史小説や風俗小説の分野で佳作や大作を発表した作家もいないわけではないが、それらはあくまで例外であって、昭和十六年の徳田秋聲の「縮図」、十八年の谷崎潤一郎の「細雪」の連載中止を見ても明らかのように、しだいにそのような時局離れた作品はそれだけの理由で発表を禁じられるようになった。とくに昭和十五年に発足した日本出版文化協会が徐々に統制を強化し、十七年三月以降は書籍の発行承認制を実施したので、時局に沿わないと判断された出版は事実上不可能になった。そのようなきびしい状況の下で、永井荷風、谷崎潤一郎をはじめ、かなりの数の文学者が作品を書溜めたり、日記を書きつづけたりして、戦後、それらを発表した。なかでも永井荷風、高見順、伊藤整らが残した克明な日記は、戦争下の貴重な記録であると同時に、すぐれた文学作品にもなっている。⁵

つまり、太平洋戦争開戦後に関して、双方の文学史とも、戦争とそれゆえの文化統制⁶によって文学活動が厳しく制限された局面を強調することで、水面下で書かれ、戦後に発表される文学作品や日記、さらには戦争に対する批判的姿勢（文学精神）を顕揚する記述となっている。逆に、文化統制の厳しい戦時下においてもなおつづいていた公の文学活動は、双方で記述されていないのだ。

こうした文学史記述のうすさとあわせて考えたいのは、この期間内における状況の質的な変容についてである。太平洋戦争については、歴史学者（日本近現代軍事史）の吉田裕が、戦局に基づいて以下のように4期に分節している。第1期は、開戦～昭和17年5月までの、日本軍の戦略的攻勢期。第2期は、昭和17年6月～昭和18年2月までの、戦略的対峙の時期（ミッドウェー海戦、ガダルカナル島）。第3期は、昭和18年3月～昭和19年7月までの、日本軍の戦略的守勢期（サイパン島守備隊全滅、グアム・テニアン両島守備隊全滅）、第4期は、昭和19年8月～昭和20年8月までの、絶望的反抗期（レイテ島、沖縄本島）⁷、といった具合である。

こうした分節ときれいに重なるわけではないが、文学場の状況にも変容がみられる。昭和17年5月26日、日本文学報国会創立⁸。昭和18年3月には、言論統制と出版界の整理統合をよりきびくするため、日本出版文化協会は改組されて日本出版会となる。また、同人雑誌にスポットをあてれば、昭和16年11月、18の同人雑誌が結集して日本青年文学者会発足。昭和17年2月には同人雑誌が『文芸主潮』『辛巳』『正統』『文芸復興』『新文学』『新作家』『昭和文学』『小説文化』の8誌に統合、昭和19年4月には、用紙不足と統制のために創刊された『日本文学者』一誌に限られた。

あるいは、中村武羅夫が、アジア・太平洋戦争期を昭和19年末に振り返った「文学者はいかに

働いてゐるか』（『新潮』昭19・12）においては、この間の動向が次のように記述されている。

戦争の影響のために、文学作品の発表舞台が、縮小され初めたのは、私の考へるところに依れば、昭和十七年以降——イヤ、実質的には或ひは昭和十八年後半期以降のことに属するのではないか。／実際に於いて、新聞の学芸欄が縮小されるとか、夕刊の連載作品が、休載しがちになるとか、雑誌が減ページになり初めたといふやうなことが、そろそろ眼立つやうになって来たのは、昭和十三年の終り、十四年になつてからである。つまり、支那事変が初まつて、凡そ二ヶ年近くの間は、何んとか彼とか言はれながらも、ジャーナリズムの「物量」は、相当に豊富なものであつたと言つていいのである。／先づ第一に新聞の学芸欄の上に、その形態の変貌とか、（たとへば文芸欄、学芸欄などといふ呼称が、文化欄に改められるとか、文芸欄、科学欄、婦人欄など、おのおの独立してゐたものが一つに纏められて、しかも段数が減るとか）縮小などといふことに、則ち戦争の影響が最も敏感に現はれ初めたとしても、それでも昭和十四年の初めころ迄は、新聞紙そのものの数が減少したわけでもなかつたし、雑誌などにしても、それまでの尠大量に対して、いくらかの減ページが行はれたとしても、まだまだ新年号などに於いては、特別の増ページが行はれた。〔略〕／昭和十六年の終り、十七年になつて、いよいよ雑誌の減ページは、相当大幅に行はれると同時に、統合などといふことも断行されて雑誌そのものの数も減少した。また、新聞紙の減ページ、数の統合が行はれる一方に於いては、学芸欄だとか、文化欄などといふものの満足な存置は、紙面の狭隘のために、事実上許されなくなつてしまつた。／斯くて新聞雑誌などの上に於ける文学作品の発表舞台は、事実上必然に縮小されざるを得ない場合に直面したわけである。また実際新聞雑誌を発表舞台とする文学作品に関する限り、減少せざるを得なかつたのが事実である。／しかしながら、それならば文学作品そのものの生産発表が、実質的に減少したかと言へば、それは決してさうではなかつた。少くも昭和十八年いつぱいくらゐるまでは、文学作品の発表絶対量は、それ以前に比して減少してはゐないと思ふ。（24頁）

こうして、日中戦争開戦後からゆるやかな変化をみせてきた昭和10年代の文学場が、まずは太平洋戦争開戦後の昭和16年末、ついで昭和18年後半を契機として、段階的に変化を遂げつつあることを指摘する中村だが、同時期の出版状況についても次のように述べている。

昨年〔昭和18年〕後半期のころからの出版統制の強化に加ふるに、いよいよ出版界の企業整備が行はれるに及んで、文芸書の出版は全くその以前のころまでの五百分の一、千分の一に減少した。（これも正確な統計に依るものではないが）かてて加へて雑誌や新聞の減ページは、極度に強化されてゆくばかりである。（25頁）

してみれば、冒頭で引用した文学史記述は、こうした実情に即したものとも捉えられる。ただし、文化統制の強化によってメディアの減少・スペースの狭小化が進み、作品数・出版点数が減じたとしても、それに比例して文学者が減つたわけではないし、それまでとは異なるかたちであるにせよ、文学者による文学活動がつづいていたことは、本稿総体を通じて強調しておきたい。

本稿のねらいは、太平洋戦争開戦後に文学者が自分たちの使命・役割をどのように考え・言表していたか——（メタ）自己言及言説を調査・分析し、その歴史的な位置づけを試みることにある。

II

昭和16年12月8日、太平洋戦争開戦が報じられた後、それに対する文学者の反応・文学場の動向についてはすでに研究⁹があるが、太平洋戦争開戦後に文学場が、いかなる構造的な変容を被り、(言表された限りで)文学者がどのように自身の立場や使命・役割を捉えていたのかについて、こと戦争末期までを視野に入れた研究は見当たらない。以下、太平洋戦争期をくぐりながら、文学者の(メタ)自己言及言説について、その内容と語り方・修辞を分析していきたい。

本節では、太平洋戦争開戦後の文学場における中心的論題の1つ、新しい文学に注目する。

無署名「新潮評論」(『新潮』昭17・4)には、「文学の新しき道」という小見出しが立てられる。そこでは、「久しくつづいて来てゐた文学の混沌状態も、最近になつて漸くその赴くべき新しき方向がみじんの揺ぎなく決定した」とされるが、「それは十二月八日の大詔渙発に依つて、国家の動向がはつきり決定されたと同時に、文学の向ふべき新しき道も、同じく決定した」(8頁)ゆえである。さらに、この「新潮評論」では、「進むべき新しき大道は、畏くも御詔書に於いてはつきり示されてゐるにもかかはらず、それなら十二月八日以後の文学理論なり、作品の実践の上に、果して大詔に於いて宣はせられてゐる国民の道を、たとへ十分の一でも、百分の一でも、踏み得てゐるであらうか」(9頁)といった問いかけを通して、「十二月八日以後」における、皇軍の戦果に比すべき《文学作品》が求められていく。つまり、新しさも含めた文学の評価軸が、《御詔書》(米英両国ニ対スル宣戦ノ詔書)に据えられ、《皇軍の武威》に比した文学の遅れが反省的に言表されているのだ。皇軍の戦果と新しい文学を類比的に結びつける発想は、本多顯彰「新文学の基礎——地道な思考——」(『日本評論』昭17・3)にもみてとれる。《大東亜戦争勃発以来、我が皇軍のをさめた赫々たる戦果を眼前に見て、一部の文壇人が、文芸興隆の時が来たやうにいふのを我々は聞く》という本多は、しかし《文学はそんな易々と興隆するものではない》(184頁)と戒め、次のようにつづける。

我々は、今日、皇軍の奮闘の有様を銃後と後世とに伝へるやうな文学を作るといふだけで事足りりとするわけにはいかない。また、占領地の宣撫と文化工作とに力を致すだけで十分だと思ふわけにはいかない。我々は、皇軍が死を懸けた戦闘によつて大東亜共栄圏の建設の礎石を築くならば、我々もまた、死を懸けた努力によつて、建設さるべき大東亜から盛り上がる力をまた我身のうちに分ち持つて、それに力強い表現を与へるところの大文学を作ることによつて、皇軍の努力に報ひ且つ唱和しなければならない。(185頁)

こうして本多も、《皇軍の努力に報ひ且つ唱和》し得る文学をつくるべきだと、類比的な修辞を用いた言明をしていく。さらに本多は、《我々独特の忠君愛国の真情》、《我々独特の親子の情愛》、《我々日本人に独特の死生観》といった《共通の人間の真実の上》に、《国民が共有しうる文学が築かれる》のだとして、さらに《国民文学》という《基礎のうへに大東亜の新文学といふやうなもの》の理念が築かれなければならない(187頁)と述べて、新しい文学の方向性を提示していく¹⁰。

次に、雑誌特集「若き世代と新文学——既成文壇について、今後の文学について」(『新潮』昭17・6)における新進作家の発言がある。あらかじめ大別しておけば、ここでは①自己の主体性を重視する方向性、②国策への貢献を重視する方向性、③①と②とを合わせた方向性、とがみられた。

まずは、①自己の主体性を重視する方向性として、木暮亮「記録的より指導的へ」からみていこう。

《ともかく、作者は腰をすゑることである》という木暮は、《性急な読者とジャーナリズムにけしかけられてをどることなく、このあたりで肚をきめて、じぶんの小主観を高めることに努め、内部の醗酵をまつべき》だとして、《高められた文学意識》を目指す。《読者に、じぶんたちの生活をあらたな眼をもつて見させるものが書かれてあるかどうか問題》だという木暮は、《読者をたのしませると同時に、その眼をひらいてくれることこそ、文学の使命》(55頁)だと言表する。やはり《自己》を重視する石川利光は、「如何に生きるか」において次のように言表する。

私は、今日の文学が現実に先行し指導的役割を果たすだけの積極性を持つに至るまでには、文学者は自己を主体的方向に於て深めてゆくことからはじめねばならぬと考へてゐる。主体的方向とは主体的に自己を超越することであり、純一無垢な精神への還帰を希求することである。それはまた現実に徹するといふ、私達にとつては一種の自己鍛錬でもある。(59頁)

また、古澤元は「新世紀への捨石」で、《文学の本筋はどこにあるか、またどう在るべきかと云ふ謙虚な真実に我々の関心が払はれ、この核心を把み、この問題解決に青年作家のみが能くし得る創意と具象的攻撃力を發揮することで事実手一ぱい》だとしながら、《それでいいのだと》(61頁)と自己肯定し、石川同様に《自己追求》を文学の道と重ねることで、精進を誓っていた。あるいは、渡邊得一郎「「文学」を信ず」は、高見順「文学非力説」(『新潮』昭16・7)¹¹に論及しながら、その議論について《はつきり云ふと「文学者」の一人角力》だと否定的に捉え、《「文学非力」だなんて！ そんなことを云ふ文学者の「文学者非力」ぢやないですか》(62頁)と言表する。いずれも、文学を信じ、文学に向きあう自己を高め、深めることを、新しい文学の急所としている。

こうした姿勢に対して、時局柄当然、②国策への貢献を重視する方向性も示された。小野英久は「今後の文学の方向について」で、《私たちが「八紘為字」の肇国の大精神に徹底するとき、詩は国境を越え民族を超えた普遍的な人間的眞実をうたひあげるものだといふ先人達の信条の依然として正しいことを再確認しなければならない》と言表して、議論の出発点に戦争のイデオロギーを据え、《この再確認により現代日本文学の混迷が払拭されて文学本然の姿に立ち還ることを切に希ふ》(56頁)と文学の再興を目指した。同様の議論は、福村久「一つの方向、秩序など」にもみられる。《伝統の認識は、過去の否定ではなく、過去を十分に現在に生かす最上の方法》だという福村は、《古典的傾向に萎縮することではなく、自国への信頼が、他国を包含する》(65頁)のだと述べて、日本の伝統を《現在に生かす》ことで、他国にも通用する普遍的な文学のあり方を思い描く。こうした言表を、より戦争に近接させると、《世界文化の歴史を画するやうな雄渾な使命をおびた大東亜戦争を契機として、こんにち日本文壇がおかれてゐる位置も亦、この歴史的使命の遂行といふことを措いては他にない》と断じる、鎌原正巳「明日の文学のために」になる。同人雑誌作家であるにもかかわらず、鎌原は《われわれが思想戦士の一人として、たとへ未熟な筆であらうとも、新しき歴史を創造する者の自負をもつて、生きてゆく日日の手記を書き綴ることが、今日文学する者の道である》(57頁)と言明しては、文学者(の使命・役割)を《思想戦士》と規定する。

さらに、上記①と②を止揚した方向性として③がある。松村暢三は「文学性への回帰」で、《新しき文学を建設せんと苦悶し、摸索する新人作家の動揺につけこむ、愛国的と称する無定見なる評論家の煽動は、現象面にのみ踊らされた附焼刃で、威勢のいい文句を並べる「借物」の思想であり、作家にその「作家的」神経の揚棄を強要し、無意識に芸術性、ひいては文学性の抛棄を迫つてゐる》と警戒を示した上で、《斯かる現状に対し、今更ながら、日本文学の文学への回帰を要請する》、た

だし《時代的性格を附与されなければならない》(64頁)と付言し、③の特徴をよく体現している。

こうして、昭和10年代末に同人雑誌の統廃合を被りながら書きつづけていく同人雑誌作家にも、商業誌デビューを果たした文学者同様の負荷がかけられていく。もちろん、各誌各作家によって重視する要素や優先順位は異なるものの、この時期すでに、①～③の幅の中で、デビュー以前から厳しく文学(者)とは何かが問われる状況が形成されていたとみられる。上記特集外でも、同人雑誌誌上で新しい文学を論じる、小川泉は「作家の意欲と一つの陥穽——文芸時評——」(『文芸主潮』昭17・10)において、《大東亜戦といふ未曾有の大事業を推進しつつある日本の現実》にあって《今日文学することは甚だしく困難だ》という前提を引きうけた上で、《作家はより新しい意志に於て、思想性に於て、現代の文学を成長せしめなければ文学者の使命は達成されぬ》、《作家の創作実践の道は凡ゆる時局の制限の中に、最も尖鋭にして新しい倫理を求めると同時に、その創立に努めねばならない》(37頁)と言表している。同様に、滋田一衛も「新文学の進路——文芸時評——」(『新作家』昭17・11)において、《新しい文学と言ふ言葉は昔から幾度となく文学者によつて繰返されたが〔略〕実は真にその実体を把握し得ないのがわれわれの偽らざる印象ではないか》(103頁)という実感をもたらした上で、単純な②ではない③と云うてよい立場を、次のように示している。

十二月八日の感激は米英の不遜に対する国民の新たなる義憤と決意とを呼びおこしたが、それは単なる不遜に向けられたものではなくて、政治的には大東亜共栄圏の樹立、思想的には日本的世界観の覚醒や創造に結びついたものであることはすでに周知の事実である。〔略〕わが皇軍の赫々たる戦果や、素張らしい占領諸地域の建設ぶりはその新たな萌芽を育成せしめつつあるが、それを真に知ると言ふことが新しき文学創造に当つて絶対に必要なのである。(105頁)

同様に、東野村章「築け日本の文学を」(『文学建設』昭18・2)でも、《新しい文学は〔略〕二千六百年の歴史の底を流れてきた日本人の血の逆しる日本の文学でなければならない》、《此処に、(日本の文学)樹立への新しい文学者の心構へも生れてくる》(14頁)と言表されており、ほぼ②と云うてよい中に、①の文学者の自我も垣間みえるようで、つまるところ③の姿勢にみえる。

こうした姿勢は、第一線で活躍する文学者にも共有されている。丹羽文雄・火野葦平「決戦と文学」(『文芸』昭18・2)において火野は、《僕は、時局的な意味で小説を書けとかなんとかいふものでないけれど、この時代の感覚とかいふものが、あまりに現はれなさ過ぎるのだ》(116頁)と、同時期の作品傾向を批判した上で、《われわれの書く小説の中に、今の時代の流れとか、歴史といふものが何かの形で現はれなくてはならぬ》(117頁)と、③に重なる自説を述べていた。

してみると、②が強調されていくかにみえる当時、《現在日本が国家の総力を挙げて遂行しつつある大東亜戦争下に於ける文学の役割の重要性から言つても、日本文学の状態が、いつまでもこのままであることは、許されない》という現状認識を示す無署名「文芸時観 大東亜戦争と文学」(『新潮』昭18・3)において、《文学がその実践を通して、大東亜戦争下に於ける役割(それは決して、単に国内的のみにではない)を果すためには、結局、文学者の錬成といふことが、非常に大きな意味を持つ》(7頁)と言表されたように、②の要素が①に食いこんで③の方向性が主流となる。

次に引く2つの言表は、その証左である。《没落に瀕した近代の文学を救ふものは〔略〕今日の現実を真に把握した新しい精神を契機とする大きな転換によつてのみ救はれる》、《今日われわれが身を置くこの大きな歴史的転換期におけるほど、新しい文学精神が切実に冀求されることも稀》(3

頁)だと、新しさを強調していく「革新文学のための序説」(『文芸主潮』昭18・3)の對馬正は、《新しい文学精神は何よりもまづ、このやうな伝統を身をもつて把握する》、《そのことなくしては文学の民族的血肉の奪還が真実には成し遂げられない》(5頁)と断じる。あるいは、青木三六は「文学の復古」(『新作家』昭18・3)で、《日本民族の将来さるべき新しき人間像は、知性によつて分裂された人間ではなく、日本民族の始原に根ざす円満具足の人格》であり《日本の新しき文学とはこの人間像を把握し描くことを目標とするものであらねばならない》(88頁)と言表する。

以上の言説を、改めてまとめておこう。当然のことながら、太平洋戦争開戦後、すぐに何かしら新しい文学が生まれるわけではない。文学場では、戦争という新しい現実、戦争する国家の国民としての自己認識を前提として、文学者としていかなる姿勢をとるかが問われ、それと不可分のものとして新しい文学(の方向性)が議論されていった。そこでは、モチーフなどのレベルで時局や戦争に沿った作品を書くことではなく、むしろ活字としては公にされない、文学者の戦争に対する認識や一国民としての自覚、日本民族や古典文学への敬意が重視される傾向にあった。

こうした言説の規則は、特集「新文学の条件」(『文芸』昭18・6)においても展開される。澁川驍は「試練と作家の自覚」において、《新しい文学に対して、私たちの希望しなければならぬこと》は《この重大な時機にあたつて深く自己を内省し、いかなるものが最も真実であるかを識別すること》(44頁)だと言明し、現状を与件とした《内省》を《新しい文学》の条件としている。《近代の日本の文学は人間を描く力倆をごくまれにしかもちえなかつた》(45頁)ことに不満を漏らす「年輪の美しさ——クラシシズムの常識——」の福田恆存は、《理想人間像の樹立は単にヨーロッパのものにすぎぬのであらうか》、《否である》と自問自答した上で、《明治以前、僕たちの祖先は武士道に鍛へられ、町人もまた肚といふ言葉のうちにかれらの人間的完成をめざしてゐた》のだが、《それに代るものをもちえずして現代に至つた》(46頁)として、世阿弥を範と仰いでいく。《在来の文学に対する懐疑や批判や、また新しい文学への要望や提唱や、文学界の論議はなかなか賑やかだが、《一向素晴らしい文学の生れる気配は見えぬ》という文学場の現状に論及する「新文学の条件」の佐々木基一は、《新しい文学要望の声は高いが、果して文学を生む条件は新しくなつてゐるか》、《恐らくさういふ充分な反省があるわけではないだらう》(47頁)とみて、次のようにつづける。

もし現在決定的に新しい状態が生れたとするなら、それは戦争が私たちの唯一の現実となつたことだ。〔略〕かゝるとき私たちはすべての問題を、国家の運命と国民の運命とに結びつけて考へ、解決する以外には如何なる現実的解決も期し難い。文学の問題の殆んどが単にインテリゲンチヤの問題として追求されて来た伝統が決定的に崩壊し始めたこと、その代りに国民的基礎が文学の直接の条件として登場して来たこと、これが新文学の真に新しい条件であらう。(48頁)

こうして、戦争が新しい文学の急所としていよいよ重視されていく中、しかし、戦争云々以前に文学者本来の姿を再評価する声もあがる。平野謙は「二人のすがた」で、大東亜文学者大会¹²において聖寿万歳の発声をした島崎藤村の姿を詳しく紹介し、《新文学発生に関する百千の論議も、所詮老藤村の発声に一瞬凝つて進つたあの文学者固有の力をぬきにしては、すべてむなしい外れ弾にすぎまい》、《文学といふ虚構の世界に命を懸ける「口説の徒」(小林秀雄)たる困難な覚悟をぬきにして、いかなる新文学発生の地盤もあり得ぬことを、私は信じて疑はぬ》(51頁)と言表していた。

特集外では、上林暁が「文学者の本然」（『文芸』昭18・8）を発表し、「《勇氣だとか誠実だとか忍耐だとか謙讓だとか》が、《フハフハした締りのないものとしてでなく、また上べだけのきれいごととしてでなく、我々の血肉として守られ、貫かれた時、国が栄えることを我々は信ずる》と述べた上で、「《そのやうな道義を各人の血肉とすること——そこに文学者の責務がある》（56頁）と、戦時下における文学者の《責務》を明示し、しかし、次のようにつづけていく。

文学といふものは、人間の精神を隈もなく充実させるものなのだ。加之、人間の精神の隠れた力や美しさを引き出すものも亦、文学なのだ。今日、文学が疎そかにせられていいはずがない。／然るに今日、文学者自身、文学を疎かにしつつあるのではないか。その一つの証拠としては、文学者の啓蒙的な役割を過度に重んじ、創造的な役割を軽視する傾向があるやうに思われる。即ち、人間の精神を充実させ、人間の世界に美と力を創り出す文学の本然が、文学者自身によつて忘れ勝ちなのだ。今日、文学者の文化講演その他の社会的役割が、重く見られてゐるのは、創造者としての文学者への尊信と憧憬があるからだ。若しも文学者が創造者であることを止めたなら、何処に尊信と憧憬とを繋ぎ止める手立が見出せようか。（57頁）

ここで上林は、文学者の《本然》による《創造的な役割》と、こと太平洋戦争開戦以降においていよいよ重んじられつつある《啓蒙的な役割》を対比させた上で、前者が後者の前提になっていることを指摘する。これは同時に、上林による文学者の使命・役割の定義・言明であり、しかも、太平洋戦争開戦以後における文学者の社会的位置づけに対する抵抗実践ともなっている。

もちろん、上林が上のような言明をする前提としては、中野好夫が「ペンと剣と」（『文芸』昭18・11）という象徴的なタイトルの一文で整理した、次のような言説状況があったと思われる。

文学者がペンを捨てる覚悟については、先般の大東亜文学者会議でも、岩倉政治などが殊にその覚悟を強調してゐたし、その前にも丹羽文雄の「海戦」に関して蓮田善明氏から、弾丸を選ぶか、文学者眼光を押し貫くかといふ形で、原本的問題が提出された。（14頁）

それでも、つづけて中野が、「現在に於ては、文学者が或ひは自らペンを捨て、前線に志願するか、なほ文学に精進するか、それは各自の決定にまつものであり、決して後者が臆病者、時局不認識者呼ばりをすべき根拠は毫もない」（15頁）と言表できたように、この時期、まだ文学者には自身の姿勢を選択する余地があった。そうした状況下で、「文学者は、文学者たるの自意識をもつ前に、臣民としてのまめ心をもつべき」だとする「奉勅の文学——三たび十二月八日迎へるに当りて——」（『文芸』昭18・12）の房内幸成は、「大東亜戦の赫々たる戦果が、神勅と皇祖皇宗の御遺訓を承けさせたまへる宣戦の大詔の言霊のみ稜威によることを先づ第一に実感する者は文学者でなければならぬ」（4頁）と、戦争・天皇との関係において、臣民として自らの存在意義を保持しようとしていく。あるいは、「私は文学を第一の問題にする気持を失つた」、「私たちの任務は文学を守ることではなくて国家と国土とを守ること」だと断じる「実践の場合」（『文芸』昭18・12）の石川達三は、戦時下の文学者について、「極端に言ふならば私は、小説といふものがすべて国家の宣伝機関となり政府のお先棒をかつぐことになつても構はない」といいきつた上で、次のようにつづけていく。

さういふ小説は芸術ではないと言はれるかも知れない。しかし、芸術は第二次的な問題だ。先づ何を如何に書くかといふ問題であつて、いかに巧みにいかにリアルに書くかといふ事はその次の考慮である。私たちが宣伝小説家なることに悲しみを感ずる必要はないと思ふ。宣伝に徹すればいいのだ。宣伝に徹すればそこに別の芸術を発見し得るに違ひない。その芸術が大正昭和の文学芸術と比較して低いといふことは言へない筈だ。〔略〕私たちは生涯をその宣伝芸術に托し、その部署を守つて闘へる筈だと思ふ。(16頁)

こうして昭和18年末には、文学者が自己同一性の根拠をどう定め、その上で、どのような言葉によって自己表象し、いかなる文学活動を展開するのかが問われる状況が形成されつつあったのだ。

Ⅲ

太平洋戦争開戦後の文学場においては、新しい文学が議論されながらも、その理念が固まらないうちに、太平洋戦争が決戦段階に入ったことで、文学(場)の存立自体が、文学者の生活など物質的基盤から、急速に脆くなっていく。こうした文学場の状況は、次に引く無署名「文芸時観 文学が滅びる、滅びないの問題」(『新潮』昭19・1)によく示されている。

実は、自分なども文学の職域に身を置いてゐる者ではあるが、若し、それが国家の要請であり、至上命令であるならば、速刻にもペンを剣に代へ、机に向ふことを旋盤に代へなければならぬくらいに覚悟は夙に出来てゐるつもりである。また、可能な範囲に於いて、より重要にして急速を要する方面に、自分のご奉公を転換するだけの心構へは、疾くに出来てゐる。

文学者として戦争 - 国家への姿勢が選択可能だった時期は過ぎ、この頃には、すでに上のような言明を大前提とするところに現状認識 - 議論の出発点は置かれている。同文は次のようにつづく。

だから、一見したところこの苛烈な決戦をよそに、書齋に閉ぢこもつて机に向つてゐるからといふので、外見ばかりで忠誠が足りないとも決められないし、巻脚絆で、鍬を担いで飛び廻つてゐるのが、一概に忠誠の志が厚いとも決められないのではないかと思ふ。忠誠とは、さういふ外見ばかりに依つて決められるものではない。要はその心構へにあり、決意にあるのであつて、たとへ書齋に於いて机に向つてゐるとしても、国家的使命を文学に依つて遂行してゐる以上、それは立派に忠誠の士であるといふことが出来るのだ。(5頁)

してみれば、決戦下の文学者の(可視化された)行動として、書齋に閉ぢこもつて文学に専心するよりも、実際行動に従事すべきだという第一の規範がまずあり、さらに、それらとは必ずしも対応していない(不可視の)《心構へ - 決意》こそが第二の規範として問われているのだ。ただし、これは可視化された言動に関わらず、自由な《心構へ - 決意》を抱き得るということではなく、不可視であるはずの第二の規範を、何かしらのかたちで示すことが要求される事態なのだ。もちろん、こうした局面においては、文学者としてよりも国民としての《国家的使命》が優先されるだろう。《激戦中の今日、実践が絶対の要求であることには疑問の余地がない》ことを確認する「文学と発表機関」(『文芸』昭19・3)の中島健蔵も、《文学の創作も、論の吐露も、また実践の一種であるとい

ふやうな実践ではなく、文学もまた何等かの効用を要求され、それに即するものだけが僅かに実践と称し得るていのきびしさ》(20頁)を感じており、文字通りの実践が文学者には課されていく。

こうして太平洋戦争が決戦段階に至ってもなお／それゆえ、文学のゆくえを問う特集がつづく。

その第一は、特集「新しき日本文学」(『新潮』昭19・1)である。

《文学者たちも国民皆働の要請に応じて勤労報国隊を結成した》ことにふれる「日本文学の新動向」の福田清人は、《さういふ動きばかりしてゐれば、文学は消えるだらうとの説をなすもの》に対して、《おそろしい文学精神の衰弱》、《一種の敗戦主義》だと厳しく批判し、《文学は国民精神の顕現》であり、《三千年の道とした雄渾なる皇国の文学が消える筈はない》と反論する。さらに、福田は《それ〔文学者の労働〕は今、文学者の創りだす一発の弾丸、一粒の米となる》のであり、《そこには本当の今日の文学の精神が、充実してゐる》(9頁)のだと断じて、いわゆる文学活動とは異なる国家への奉仕(労働)を、文学者の《文学精神》＝《国民精神》の顕現として意味づけている。高木卓も「大きな動向」において、旧来の文学観念を批判する文脈で、《かつて事実上、技術ゆゑ否技術だけの小説がそのまま通用し「芸」の作品が崇められてゐた時代》から《技術と内容とが並行的に伸びてゆくといふ発展過程》へと《大転換》(11頁)を遂げたことを語っていくだろう。

特集の第二は、「決戦下の文学精神」(『文学報国』昭19・11・1)で、次のリード文がある。

戦時下における文学者の歩むべき道については、今日までも屢々採りあげられ、論じ尽くされた感がある。改めて問ふまでもなく、総力を結集して勝利へ邁進するの秋掃一すべき点は国民等しく異なるところがあらう筈もない。『文学』は常に『正義』であつたのである。だが時により、憤慨の余り他を叱咤するに偏し、無意識裡に自己自身への厳しさに、いさゝかたりとも弛みを生じたること絶無と言へようか。苛烈緊迫の一途を辿る決戦のこの日、作家の精神の在り方、その生活との触れ様に想ひを到すことを必ずしも意味なしとは謂ひ得ぬであらう(2面)

舟橋聖一は「道は本能の外に非ず」において、《こゝ、両三年、文学者が競つて政治運動に趨つて、殆どみな手を焼き、勢力を消耗してしまつたもの、つまりは、観念主義の空転に対する注意、戒心が等閑だつたのだ》と述べて、戦時下における文学者の《政治運動》への関与の仕方に誤りがあつたことを認める。その上で舟橋は、《文学者の務め》を、《政治家、教育家、宗教家の範囲を超えて、戦ふ国民の生活本能にまで深くちかに立入り踏入り、その偽りのない心に手を触れることが第一》だと改めて定義する。

また、《文学者が文学に専念することの許されない時代であつてみれば、文学者が文学と直接関係のない部署に一役つとめたとしても、なんら異とするに足らない》とする「峻厳な真偽の判別を」の原奎一郎は、《その数々の部署のなかには、むろん文学者に相応しい部署もあることであらう》、《文学精神の發揮できるやうな部署もないとは云へまい》と認めた上で、《しかし、さういふ文学以外の部署につくことによつて、より旺盛な文学精神の昂揚が得られると考へたり広言したりするのは、文学者の負惜しみか瘦我慢としか私には考へられない》(1面)と断じて、さらに次のようにつづける。

最近、書かれた作品に拠らずとも、作家は飽くまで文学精神を護持せねばならぬといふ意味をのべたある作家の文章を読んだが、事実こんにち多くの文学者はさういふ決意を持たねば

ならぬところまで追いつめられてゐるのかも知れぬ。書かれた文学にのみ専念してゐられない事態が逼迫すればするほど、文学者は、己が文学精神を一国民としての至誠や戦力への奉仕と判別し、その醇乎たる在りやうを見失はぬ用意が肝腎であらう。(1面)

ここでは、先の福田とは対照的に、平時の文学活動が困難な時期においてこそ、国民としての《至誠 - 奉仕》から、《文学精神》を腑分けして自覚し、それを《見失はぬ用意》が説かれている。

つまり、舟橋や原は、『文学報国』という媒体ながら¹³、純粋な文学精神の擁護を謳っていたことになる。むしろ、戦時下における文学者の社会的役割を過剰に意識していたのは、「自己を正す精神」の伊藤整かもしれない。《一兩年以前から亡父の生活に材を得て日露戦役について書かうと、その資料の間に書齋にある時間の大半を送つてゐる》という伊藤は、《ことごとくに自分の中にある前時代風な頹廢のかげの動揺に悩む》、《その度に自分を鞭うち、皇国民としての反省をきびしくしなければ、気持が崩れる》と苦悩を吐露しながら、《文を書くといふことは、さういふ自己是正をする過程において可能》(1面)だと信念を表明して創作をつづけていく。

こうした決戦下の状況におよそひるむことなく、武者小路実篤は「文士の現在の使命」(『文芸世紀』昭19・6)において、文学者について言表しにくい現実を次のように整理してみせる。

文士は文士としてかういふ時にどう言ふ仕事をするのが一番適してゐるか。文士にもいろいろの人が居る。一概にきめるわけにはゆかない。かう言ふ時期に一番直接な仕事に従事出来る人もある。文学の仕事を一時投げすてゝもつと直接役に立つ仕事に従事する人もあるだらうし、又文の力をもつて士気を鼓舞したり、製作の奨励に直接役に立つ仕事が出来人もあるだらう。さう言ふ人々はかう言ふ時代に自分の文士としての仕事をするのに迷はずにすむわけである。時勢の要求そのまゝに役に立てる人だからである。〔略〕しかしさう言ふ役に立つ事が出来ない、世間から見て不急と思はれる、いくら書いても本にして今の時代に発表する事が出来ないものきり書けない文士はどうしたらいいか。(6～7頁)

こうして、文学者も国民である以上すべからず戦争 - 国家に奉仕すべきだ、という同時代の規範をたやすく突破する武者小路は、時局に即応できない文学者を問いの中心に据えて議論を進めていく。《文士の仕事は仕事の性質上、現代的なものにだけ全力をそぐわけにはゆかない場合がある》、《文士になる人間は、現代だけの事を考へるのに不適當な人間が随分ある》(7頁)という、文学者側の事情に正しく配慮を示す武者小路は、《だから文士に後はどうなつてもいい、今だけのために働けと言ふのは無理な場合がある》と明言した上で、《日本の未来の事を心配して、日本本来の文芸のあり方とか、今の日本はどうしたらいいかと言ふ問題なら、文士でも真剣になつて考へられる》、《さう言ふ人も今の日本にあつていゝ》(7～8頁)と断じて、役に立つ方法と時期について、必ずしも現在の太平洋戦争下という条件に縛られない別の回路を示しつつ、次のように述べていく。

人間の心のうるおいは結局永遠なものから来るのだと思ふ。永遠を愛するからこそ、死にも克てるのだと思つてゐる。永遠から切りはなされたら荒涼たるものを感じるだらうと思ふ。戦場にゐる人に詩や和歌をつくる人が多くなるのも、その心の荒涼さをいやしたいからと思ふ。／純文学は益々愛される時がいやでもくると思ふ。戦場からの要求に人々はこたへるた

めには、純文学者が益々純文学に進む事がいかに必要であるかを、人々は知る時が来るはずと僕には思へる。／この事が本当にわかれば、文学者は自分の使命を知つて、ますます真剣に自分の本音を吐くやうに努力する事に自信と自覚を持つべきである。(その他の仕事では恐らく大半の人は半人前も働けない場ふさぎ的存在であらう)しかし今暫くはそれでは生活が出来ないかも知れない。本の必要をきめる人は戦地で戦つてゐる人間の本心がかかれた本に餓えてゐる人ではなく、内地にゐて本に食傷しすぎてゐるいろ／＼の事に煩はされてゐる人々だからである。この事は考へねばならない時がその内に来ると僕には思はれる。(8頁)

ここには文学者の人間性、芸術性への信奉に基づいた中長期的な文学者の使命 - 役割が説かれているが、もとよりこうした言表は当時において異色に映じる。対置すべき支配的な言説は、石川達三「論説 作家は直言すべし」(『文学報国』昭19・8・1)である。《作家はもはや自分の一切を失つた》、《たゞ残つてゐるのは作家の人格のみ》だという石川は、次のように主張を展開していく。

文学に執着する心をすて去るべき時である。まだ残つてゐる寥々たる雑誌や新聞の文芸欄への執筆を心懸けるのも愚劣であり、他の形式、即ち放送や文芸や壁小説などで生活と名声とを維持しようと考へることも見すばらしい努力に過ぎない。書き卸し小説で生活を立てようとする考へ方もまた、取締りの警官の目をくゞつて野菜の買出しをやるやうな悲しい努力ではなからうか。／端的にいふならば日本の文化当局は吾々に小説を要求しては居ないのだといふもあまりに失当ではあるまい。〔略〕小説は最小限度に存続せしめればそれでいゝのである。

こうして旧来の文学活動の大半を否定する石川は、しかし文学者として、《失ふべきもの一切を失つて、いま吾々は裸》であり、《私はこの裸形に期待する》のだという。石川によれば、《今こそ、作家が真に作家たるべき時》なのであり、さらに《吾々が十年二十年たゞき上げて来た筈の人間修業が、いまこゝで役に立たないならば、吾々はみづから作家たる事を称してはなるまい》とまでいう。こうして、文学者のエッセンスに《人間(修業)》を据える石川は、《現下国内の最大難関は民衆の道義心の底下》だと指摘し、《こゝに私は作家が働くべき大きな分野を見る》——《一切を失つた作家は、右の如き隘路にむかつて挺身して行ける筈》で、《いはゞ島をまもる守備隊が一切を失つて最後の突撃を敢行するそれにも似た決意と行動とが有つてよいと思ふ》として、太平洋戦争開戦後に顕著な、戦争と文学活動を類比的に捉える修辞によって、文学者を思想戦へと動員していく。さらに石川は、《この拙文を以つて矯激なりといふ人があるならば、彼は今日の危機を真に知らざる者であると私は答へるのみ》(1面)だと付言し、現状への高い意識を顕示している¹⁴。

もとより、《矯激》である。とはいえ、こうした論調への反論は難しい言説状況の中、李無影は「決戦文学樹立の爲めに」(『文学報国』昭19・8・1)を書いていた。《国家存亡の決戦段階に直面し、我々文学者の一国民としてのありかたにつきまして、内外を問はず、非常に激しく論議されるやうになりましたことは、その是非は兎も角、文学の戦争への寄与の偉大さが立証されたことの一つ》だと前置きする李は、《これらの論議を大別し》、《文学の書齋籠城に対する部外者からの非難》と《文学の書齋籠城、必ずしも、戦争からの離反にあらずとする一派》に分節した上で、《私は後者を支持する者》だという李は、《文学者である前に、一国民》だと明言しながらも、《よき文学者が文学を捨てて耕作や機械製作に従事するといふことは、戦争遂行上欠くべからざる偉大な理科学者を

して、耕作に従事させるやうなものではないでせうか》(1面)と、文学者固有の役割を示していく。はっきりと《作家は野菜の買出しをやつてもなほ、持つてゐるペンを捨ててはならない》と断じたのは「文芸時評 正直の喪失」(『文学報国』昭19・9・1)の壺井栄で、次のようにつける。

今日の状態では作家は正直に物をいふこと、即ち文字にすることについては充分の自重を要する。しかし作家が正直な眼で見、まことの心であつたならば、その言葉の裏や、文章の行間にあふれるものがある筈である。私たちは、いつの世にも通用する文学を生まねばならない。文学をもつて報国せんとする作家はどんな場所にあつても筆を捨ててはならないと思ふ。(2面)

純粋な文学精神というには、《報国》という文字が明示するように、決戦下の状況が配慮されているが、優先順位としては《作家魂》と表現された文学精神が守られようとしている。これに対し、岩倉政治は「道義と文学」(『新潮』昭19・9)で、《今は尠くとも文学者の精神が、撃敵救国の先頭に立つべき日に来たのではないでせうか》(26頁)と述べ、《祖国の危急》を《生きた道義によつて新しく、生々と支へ》る役割について《第一の責任者は文学の徒》(27頁)だと位置づけた。さらに、《「原稿用紙的文学」が、今や戦時下緊急の職域生活の中に埋没してゆくといふことは、愉快といふよりも壮快》だという岩倉は、《私も、書くことから次第に遠ざかりながら、いよいよ書くことの貴さを思ひ、またたとへ一枚の文章を書かなくとも、自分の日常生活の上に真の文学を行じ、自分の周囲にもそれが行じられるならば、それがおのづから皇国の真姿を顕はにし、国民の道義を復活せしめて、最後の勝利に導くに相違ないことを確信する》(30頁)のだと声明する。

こうして極端な議論が乱立する中、特集の第三は「文学の効用」(『新潮』昭19・9)である。

《文学が戦争にどのやうな面に於て、どのやうな形でも役立つものであるかといふことについては、この数年来殆んど一切の論議がなし尽された感がある》と整理する河盛好蔵は「戦時下の文学の効用」において、《今日では文学無用論を唱へる人は誰一人としてない筈》、《それでゐて文学者が充分にその機能を發揮したかといふと、必ずしもさうではなかつた》(18頁)と反省的に振り返った上で、《文学者が国民として、人間としての真骨頂を示すべきは正に現在であつて、今後続々として起りうべきさまざまな困苦や悲惨事に彼がいかに対処するかによつて彼に対する一切の評価が定まる》と前提して、《逆説のやうではあるが、私は文学者が再び自己に立ち還ることを要請したい》と主張する。ここで河盛が念頭においているのは、《私は文学が戦争とびつたり呼吸を合せて、その本来の機能をあますところなく發揮しうる時の到来したことを心から悦ぶ》というように、戦争とも不可分な文学である。具体的には、《我々の精神を一段と高いものにする内的生活の悩みと争ひを誠実に描いて我々に慰めと力をもたらしてくれること》や《我々の感情生活に秩序を与へること》は、河盛によれば《自己自身に還つた誠実な文学者でなければ断じて果すことができない》(19頁)のだと断じて、国民生活に対する文学者の役割を主張していく。《今日といふ日、文学のたどるべき方途はとにもかくにも国民倫理の革新であり、道義力の新しき振興》だと文学の役割を明示する平田次三郎は「最高の精神と精巧な技術」において、《現下の文学のいつはらざる姿は、あるひは国家、国民の文学に求めるところに副ふものでないかもしれぬ》という現状認識を示しはするものの、《国家と国民と文学との正しい結びつき》を《前提》として、《古典に支へられた現下の文学はかくて炳乎として戦ひのさなかで、その効用を明らけくかがやかすにちがひない》(21頁)と、文学の位置づけを再設定する。さらに、《老少不具者の外は、国民全部武器を把つて起つ秋が来た》

という中山義秀は「投筆戎軒の事」において、「砲弾の前に、貴賤貧富の差別はない」、《外敵に対し国民が一心一体、国威を中外に輝かすのはこの秋だ》と、国民としての立場を前景化させ、《日本民族の光栄も実力も、真に今後に於てこそ赫奕として発揮されるであらう》、《この意気、この信念を同胞に伝える以外に、我等の任務は無い》(24頁)と、文学者の任務を戦争・国家に集約的に向けていく。

以上の言表は、具体的な対象や理念に差異はあるものの、旧来の文学(者)の役割を否認し、国民として戦争・国家への貢献に重きを置いたものである。こうした言表に対し、藤懸湛は「文学の効用とは」において、《ひとが文学の効用といふ言葉に眉を顰める今日、文学は逆に昔の秘薬たることをやめて、不完全な手段的・技術的意味へと低落する》のだと整理し、《文学は効用を失ひ、しかもひとはこれを訝らうとしない》ことを《痴呆状態》だと称して《訝る》(24頁)。

こうした言説上の争闘については、太平洋戦争開戦後に繰り返されてきたことだが、鎌原正巳「青春と文学の志(文芸時評)」(『日本文学者』昭19・11)において、改めて次のように整理される。

ちかごろ、ペンを捨てて銃をとり、ハンマーを握るのが文学者の今日に生きる道だと主張する者と、いや文学者はいかなる事態にならうとも、許される限りはペンをとつて創作に専念すべきであると叫ぶ者と、二つの考へ方がなされてゐるやうである。何れも要するに、文学者として今日身の置きどころを定める場を問題にしてゐるのであり、いはば处世の方便なのである。戦線に、或は工場に身を挺して敢闘することも、ペンにおのれの全霊を托することも、現実の問題としては、何れが是、何れが非と断ずることは出来がたい場合が多いであらう。ただ何れの場合も、根本の問題は文学に托してゐる情熱の深淺にかかつて居り、この一筋にいつでも殉ずる精神の強弱に関連して居るのである。(6頁)

文学創作を貫くのか、国家への貢献を目指すのか、いずれにしても重視されるのは不可視の文学者の《精神》である。もとより、その《精神》は、文学精神のこともあれば戦争イデオロギーのこともある。また、国家への貢献にしても、生産の現場へ赴くことから、戦意高揚の文学を書くこと、さらには日本文化や古典の伝統を守ること、国民生活の慰安や娯楽提供まで、その幅は広く、明確な境界線などを引き得ない。それでも、時局ゆえに文学者は立場表明を不断に求められていく。

たとえば、尾崎士郎は「論説 全文学者に檄す」(『文学報国』昭19・10・20)において、《われが夙に文学の使命は政治の原理をつらぬくことにあることを力説し来つたのもこれを要約すれば精神の道統を明かにし、国民感情を開頭純化することに帰一する》、《茫洋たる流れの中に期せずして全国民の情熱を結集し影を踏み響きに応へて、不拔の信念を築きあぐるところに儼乎たる文学の伝統を示す》と述べ、さらに次のようにして文学を再定義していく。

文学はすでに言葉でもなければ文字でもない。況んや形式でもなければ技術でもなく、唯民族の決意を明かにし、一瞬を永遠に変ずる美しさを身をもつて示すことによつて一つの方向を示すことが出来るのである。(1面)

戦時下の人気作家でもあった尾崎士郎は、生産の現場に向かうことはなく、限られた媒体に、歴史小説を書き継ぎながら、日中戦争開戦以後、文学(者)の役割をかわらず提示してきた。尾崎は、文学のための文学ではなく民族のための文学を唱え、《決意》の表現手段として文学を捉えている。

こうした言説は、それらを構成する要素としては昭和18年までの議論を反復しているようだが、戦局の悪化、書き手個々の現実的な困難によって、より身も蓋もないものになっていく。以下に検証する、昭和19年末の言説からは、こうした背景が色濃くにじみでている。たとえば、田宮虎彦は「文学者の自恃」(『新潮』昭19・12)において、次のように文学の意義を改めて確認していく。

文学の実体、言葉をかへていふならば、真の姿といふか、如何様にもいひ得ようが、文学が現在といふ激烈な時に、何か遠慮せねば生きてゆくことが許されない様な、そんなものであるならば、我々文学に志を立ててあるものの生き甲斐は、まことに淋しいものといはねばならぬ。／だが、文学は決してさやうのものではない。[略]現在の様な時に於てこそ、文学の光芒はいよいよ燦然たるものがなければならぬのである。(4頁)

さらに、「我々は、かうした戦況下に際会することによつて、自分を文学者と信ずることに大きな鞭を得てゐる」(5～6頁)と明かす田宮は、「文学を、戦局から遠いもの、と考へることは、我が国の文学がおちいつた明治大正の意味における陥穽であり、その故にこそ、文学のまつてゐる装ひを文学だと誤り考へさせ、文学をその積極的な力から遠ざけしめた」(6頁)のだという。こうして田宮は、太平洋戦争末期における文学(者)の有用性を、次のように示すことになる。

例へば、現在の文学作品の貧困が、単に文学作品の貧困のみに問題が終らず、国民精神の強弱にまで及ぼす恐れのあることを私はいひたいのである。現在の国民が、我が国現代の逞ましい意欲のこめられた作品でなしに、戦争前の作品に毎日の心の糧を求めてゐる事実を直視する時、文学者の自信の喪失ほど重要な問題は他にないとさへ考へられるのである。(6頁)

ここで《文学作品》の内実までは論及はないが、《国民精神》に働きかけ、そのことを通じて、戦争-国家に貢献し得る文学作品を指していることは明らかである。同様に戦争末期の文学者を肯定的に捉えながら、しかも戦争-国家への直接的な貢献をすりぬけていく言表もあらわれる。浅井眞男は「文学施策と文学生産」(『新潮』昭19・12)で、「作家は不当な圧迫を受けても生き抜き、成長する代りに、保護奨励しても彼等にとつて別に有益でもない」と、その文化統制に対するたくましさを強調しながら、「彼等〔作家〕は新しい価値の創造者たるべき筈であるから、政治とは別の「時」に所属する」と、この現実から視座を転換してみせる。《勿論如何なる種類の文学も全的にこの民族、この国家に所属する》と譲歩をみせる浅井は、「今の戦争遂行、今の政治が等しくわが民族・国家の生命の発露であるやうに、文学もまた別の面に於けるその表現」だとしながらも、「これら諸表現はその基底を一つにしてはゐるが、その表現形態の完成は時を同じくしない」(9頁)と断じていくのだ。これは、武者小路とは異なる回路による、文学精神の保持の仕方である。もちろん、これ自体は当時において異質な言表で、その大半は、次に引く小村武羅夫「文学者はいかに働いてゐるか」(『新潮』昭19・12)のように、きわめて厳しい現実に向きあうことを余儀なくされていた。

敵を撃滅するか、日本が亡ぶか、二つに一つしかない大戦争を遂行してゐて、而して今や決戦中の決戦に直面してゐるのである。国民のすべてが、あらん限りの力を捧げて戦力を増強して、何が何でも勝たなければならない。則ち、一人でも多く、直接に戦力増強のために

力を致すべく参加しなければならないといふ国民的良心と忠誠心とが、文学者にその「生命」たる「表現活動」の世界をも潔く見捨てさせたのである。それぞれの事情に応じて生産職場に、或ひは地方疎開にと転出させ、戦力増強のために文学者を馳せ参ぜしめてみるのである。(26頁)

ここによく示されたように、昭和19年末における文学者の選択は、もはや姿勢や理念といったレベルのものではなくなっている。もちろん、文学者たちは、文学者／国民としての自己認識 - 自己表象によって社会的位置を言表し、自らの姿勢を示してはいくのだが、それは従来よりも現実的な条件に強く規制されてきている。もとより、本稿で検証してきたように、太平洋戦争開戦後の文学場においては、文学者の社会性（社会的有用性 - 存在意義）¹⁵が昭和10年代前半に比してより厳しく問われていく中、不可視の領域における文学精神や愛国心と、可視化された言論活動や实际行动にはさまざまな選択肢 - 組みあわせがあり得た。しかし、次第に文学者である以前に日本国民であるという属性が前景化され、旧来の文学者の本分を捨てたかのような戦争 - 国家に直接寄与する言動が目立つ一方、それに対する反動のように、文学精神の保持や水面下での活動が後退戦よろしく展開されてもいった。これを昭和10年代の文学場に通底する問題に重ねれば、太平洋戦争開戦後、文学者の社会性（社会的有用性 - 存在意義）が極度に重視される状況が出来し、その偏重ゆえの反動 - 抵抗として、芸術性もかろうじて保持されていたことになる。

総じて、戦局の推移に伴う発表媒体の激減、生活難の中で、文学精神の有無／強弱とは別に、文学者が生き延びていくために、生産の現場や地方疎開を選ばざるを得ない状況が日常化した昭和10年代末、それでも文学者 - 文学精神の芸術性を重視する言表もまた、支配的な動向の間隙にまぎれこむようにして、相互補完的な関係を切り結びながら当時の言説の中には存在していたのだ。

IV

最後に、昭和10年代末における作品評価と評価軸を検討することで、まとめにかえたい。

太平洋戦争開戦後、本稿Ⅱ・Ⅲにおける議論が蓄積された果てに、藤口透吉「標語文学への『断』——文芸時評——」（『文芸首都』昭19・7）の、次に引く一節のような評価軸が示される。

この大いなる発展の過程にある戦争の環境にあつて作家のなすべきことはこの新しき環境に近合することではなく、環境の中に息づいてゐる鼓動をしつかり把握することにあるのではないだろうか。その一つの方法として身をもつて生産現場に飛びこんでいくのもいゝだろう。環境の把握によりて得た作品が、たとへ自信のないものであらうともそれが言葉の規格から脱けてた真に闘ひつゝある人間の意欲が作品の底に流れてみるとすれば、単に男女の関係に取材しようと家庭の日常茶飯事を描かうと、そこには戦争につながる逞しい闘魂がみづから滲みでてくるにちがひない。(34頁)

同誌の前月号には、保高德蔵「最近の作品（文芸時評）」（『文芸首都』昭19・6）が掲載され、そこで保高は、池田みち子「邦人商社」、大原富枝「二番稲」、同「円ふ灯」、吉川江子「姉の日記」、八木義徳「劉廣福」、濱野健三郎「梅白し」、妻木新平「名医録」、安原俊之介「彼の道」、金原健児「犬」、林柁木「昔の人」、澤田文造「雪の融ける頃」、柳町健郎「銀河」といった《新人とみなされ

ている人々》の諸作にふれて、総括的に次のような批判を展開していた。

現在、祖国日本が開闢以来の大戦争に突入してゐることに就いて、作家として如何に生活しつつあるかといふことが頷けないやうな作品を書いてゐる。私は戦争小説や、南方を題材にした大規模な作品を描けといふのではない。現在の日本が直面しつつある困難を感じ、それに対し如何に処すべきかを苟も作家たるものは明確に決意してゐなくてはならないことを云ふのである。〔略〕憂国の心、殉国の魂が溢れてゐれば日常の些事を描いても、その文章は直ちに国と共に呼吸をしてゐるものである。私はそれを云ひたいのだ。(25頁)

評価軸自体は、先の藤口と同様と考えられるが、ここでは個別具体的な作品に即して、評価・判断が下されたことになる。同文の上記発言に対しては、佐藤春夫が「新文学の胚」(『芸芸春秋』昭19・9)において、「ほとんどすべての「新人と見なされる人々」は「現在、祖国日本の大戦争に突入してゐることに就て、作家としていかに生活しつつあるかといふことを頷かせるに足るやうな作品を書いてゐる」と云ひ直したく思ふ(43頁)と反論を唱えている。同文で佐藤は、芥川賞銓衡委員として新人作品を読んできた経歴を振り返りながら、「最初期待したやうに同時代の新人から新しい文学を教へられるやうな格別のものに接しなかつた」としながらも、「旅行から帰つて以来久しぶりの珍らしさから偶然読んだ二三の青年作家の作品」、さらに「芥川賞の候補作品の数篇」を読み、それらに「共通に流動してゐる新しい精神を感得した(42頁)のだという。その急所は、佐藤によれば「形態も手法も精神も昨の頹廢の文学を健康に回復しようとする意向が或る程度まで具体的に示されてゐる(43頁)ことで、大原富枝「円ふ灯」、半田義之「珊瑚」、八木義徳「劉廣福」、濱野健三郎「梅白し」、妻木新平「名医録」、安原俊之介「彼の道」、林柁木「昔の人」、檀一雄「天明」、小尾十三「登攀」、劉寒吉「古戦場」といった作品から見出されたものだという。そこから佐藤は、次のようにして文学者の使命・役割について論及していくだろう。

抑も我々の立つてゐる文化乃至思想の戦線はこれを最も後方のものとも又最も前方のものとも思はないけれども、譬へば台風の中心の如く一見ごく静寂でありながら容易ならぬ部署であると思ふ。〔略〕各種の増産が緊急時である事は申すに及ばず千万承知してゐながら、我々が今に到つても田をつくらずに依然として詩を作つてゐる所以も亦ここにある。我々が非戦闘員として許されてゐる限りは人に忘れられ勝ちなこの重要な戦線を受け持つてゐる。〔略〕これ等の事業は増産工場に働くやうに一朝一夕にその成績が直接戦力に影響するものではないが、これが文化戦線の文化戦線たる所以であらう。さうしてこの功績は今に建設の時代に入つてからはじめて思ひ出されるであらう。(44頁)

つまり、佐藤の一文は、新人へのエールであると同時に、昭和10年代末になお《田》ではなく《詩》を創りつづける《文化乃至思想の戦線》を担う文学者の立場表明ともなっているのだ。しかも、佐藤は同時代の／新人の視座にたち、次のように評価軸についても積極的に論及していた。

新文学にはいつも新文学を測るべき新規な尺度が必要である。〔略〕今日の文学がたとひ貧弱であつても、例へばその描写力が不足して居ようとも、描写万能の昨の批評眼の既成観念からこれを軽く評価し去つて、その未熟を責めるあまり、他の新規な長所を見落すやうな事は、新しくそれ故にまだひ弱い文学を育てる方法ではあるまい。(45頁)

しかも、佐藤は最後に《この胚が発芽し、成長し、開花するためにはまだ可なりの時日と商量とを経なければなるまい》(45頁)と付言し、《政治とは別の「時」》(浅井真雄)を待つ構えをみせた。

この佐藤春夫「新文学の胚」に賛意を表したのは、「文芸時評 生産者の群像」(『文学報国』昭19・10・1)の丸岡明である。丸岡は、《今は誰もが文字通り公私多忙な生活をしてゐる〔略〕それでもなほ小説を書いてゆくには、たゞ自分一個の気持ではなく、なにかもつと大きな力が後で働いてゐて、これは是非、自分が代つて書いて置かねばならぬといふ謙譲で、しかも強い意志がなければなるまい》と、文学精神の保持を謳った上で、濱田隼雄「生産命令」、八木義徳「劉廣福」、中山義秀「油田」、榊山潤「平山常陳」といった作品群を総じて《民族の命と時代の呼吸の結晶に似たさうした作品》を、《一度根こそぎ打崩されるやうに見えた散文の精神が、又方向を転じて根気よく積上げられてゆくさまを、私はそこに見るやうな気がする》(2面)がゆえに、高く評価していた。

このように、太平洋戦争開戦後、戦争 - 国家への貢献が日増しに求められ、何らかのかたちで社会性を示さないことには、存在意義を承認されづらい状況がつづいた文学(者)ではあったが、そうした方向へ加速していく言説の中、さらには現実的に文学場の存立自体があやうくなっていく中、《文学精神》を核として、言説／実作／実生活にさまざまな工夫や修辭を用いながら、文学(者)の使命 - 役割は、鍛えられながらも言表されつづけていた。もとより、戦局は終戦まで悪化の一途をたどり、《大東亜各地域の作家が、祖国の土に塗れ、祖国の血にめざめ、祖国のこころを文学の上に、生きた呼吸として造形するところに大東亜文学は芽生えて行くであらう》(3頁)という見通しを示した神保光太郎「大東亜文学序論」(『文学界』昭19・2)や、《皇国文学の伝統の存するところに思ひをいたせば、われらこの重大事に何をなすべきか、自ら豁然たるものがある筈》(1面)だと揚言する戸川貞雄「論説 皇国文学論序説」(『文学報国』昭20・3・1)などの文学論が掲げられていく。

本稿で詳論してきた、多面的で複雑な様相こそ、同時代の視座からみた太平洋戦争末期における具体的な文学活動であり、その内実とあわせてこうした言表が少なからず産出されていたことも、文学史記述に抗して銘記しておく。

-
- 1 昭和10年代という枠組みからの文学史の再検討について、拙論「研究対象／問題領域としての昭和一〇年代文学」(『阪大近代文学研究』平30・3)参照。
 - 2 平野謙『昭和文学史』(筑摩書房、昭38)、241～242頁。
 - 3 注2に同じ、244頁。
 - 4 注2に同じ、251～252頁。
 - 5 曾根博義「戦前・戦中の文学——昭和8年から敗戦まで」(『昭和文学全集 別巻』小学館、平2)、393～394頁。
 - 6 双方で言及された、日本出版文化協会については、吉田則昭「戦時期メディア界再編成の理論と実際(2)——出版新体制——」(『戦時統制とジャーナリズム』昭和堂、平22)参照。
 - 7 吉田裕『日本軍兵士 アジア・太平洋戦争の現実』(中央公論新社、平29)、14～22頁。
 - 8 日本文学報国会については、高橋新太郎「総力戦体制下の文学者——社団法人「日本文学報国会」の位相」(酒井武史編『社団法人 日本文学報国会会員名簿』新評論、平4)、櫻本富雄『日

本学報国会『大東亜戦争下の文学者たち』(青木書店、平7)、吉野孝雄『文学報国会の時代』(河出書房新社、平20)ほか参照。

- 9 小田切進編「十二月八日の記録」(『文学』昭36・12)ほか。なお、あわせて拙論、「“一二月八日”をいかに書くか——「十二月八日」」(『昭和一〇年代の文学場を考える 新人・太宰治・戦争文学』立教大学出版会、平27)、同「マレー・シンガポール攻略作戦をめぐる報道文——昭和17年文学場一面」(『文教大学国際学部紀要』平30・1)も参照。
- 10 昭和10年代の国民文学論(言説)については、拙論「昭和一〇年代の国民文学論——文学場のインターフェイス」(『日本研究』平31・10予)参照。
- 11 同論の同時代的な意味作用について、拙論「同時代のなかの「文学非力説」論議」(『国語国文』平30・10)参照。
- 12 第一回大東亜文学者大会については、拙論「第一回大東亜文学者大会の修辞学——大東亜共栄圏言説の亀裂」(『神奈川大学アジア・レビュー』平30・3)、同「文学(者)と思想戦——第一回大東亜文学者大会の修辞学・補遺」(『文教大学国際学部紀要』平30・7)参照。
- 13 高橋新太郎「解説 『文学報国』の時代——しのぎと抗い」(『復刻版 文学報国』不二出版、平2)には、「『文学報国』なる、おどろおどろしい紙面の蔭に、文学者の枢要の本音が、その矜持と共に少なからず示されている」(13頁)という指摘がある。
- 14 石川旺「解説 言論表現の自由と戦後」(石川達三『徴用日記その他』幻戯書房、平27)には、ここで引用したものを含めて、戦時下の言表について《言論統制が厳しかった当時の状況を考慮しつつ読む必要がある》(245頁)という指摘があるが、あわせて本稿で示した当時の言説との偏差もまた視野に入れるべきであろう。
- 15 拙論「昭和一〇年前後の私小説言説——文学(者)の社会性」(『昭和一〇年代の文学場を考える』前掲)、「昭和一〇年代を見通しながら日中戦争開戦後の文学場を考える」(『日中戦争開戦後の文学場 報告／芸術／戦場』神奈川大学出版会、平30)参照。